

第15回環境保全型農業推進コンクール応募事例の取組概要

大賞(農林水産大臣賞)			
名称 (所在地)	対象作物	実施面積	取組み概要
上和田有機米生産組合 (山形県高島町)	水稲	68.2ha (59戸)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○上和田有機米生産組合は、1986年に、「食」の本質の追究と地域環境の保全、中山間地農業の自立などを目指して設立された。</li> <li>○栽培面積のすべてで、完全無農薬無化学肥料栽培と初期生育に除草剤を一度だけ使用する少農薬栽培を実施している。</li> <li>○現在の組合員数は59名。そのすべてがエコファーマーの認証を受けている。また、組合としてJAS有機の認証を制度の設立当初から受けている。</li> <li>○組合オリジナルの肥料を設計、製造して使用している他、完全無農薬栽培の実施に当たり、除草に係る労働負担を軽減するため「アイガモ農法」「紙マルチ栽培」などの技術を導入し、収穫期には、乾燥の手段として「自然杭かけ乾燥」又は「遠赤外線乾燥機」の使用を義務付けている。また、販売価格は、消費者、取引業者と話し合い「有機栽培米」としての付加価値を付して生産者側に有利に設定している。</li> <li>○町内における大型ヘリの農薬空中散布について廃止活動を行い、平成17年に廃止を実現した。</li> <li>○援農、生協まつり等を通じて、消費者との相互交流を行っている。また、地元の小学校、高等学校、首都圏等の大学における授業の一環として、農作業体験を通じた食農教育を行っている。</li> </ul>
農事組合法人 佐原農産物供給センター (千葉県 香取市)	野菜(果・葉・根菜)	257.82ha(147戸)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1981年に香取市(旧佐原市)の農業青年6名で設立し、生活協同組合に鶏卵と青果の供給を開始した。設立当初から「食の安全」と「環境」へのこだわり、つくる側と食べる側の顔の見える“産直”の信頼関係を背景に販路と組織を拡大し、現在は茨城県の生産者を含む147名の組織となり、青果物80品目を栽培している。現在の取引先は生活協同組合、量販店、加工業者で2009年より地元道の駅直売所にも参加する。</li> <li>○設立当初から、土壌診断に基づいた施肥設計や有機質堆肥の投入、緑肥を入れた土づくり、指定の有機質肥料を使用した統一栽培、特別栽培に準じた農薬使用やに</li> </ul>

			<p>んじん・さつまいもでの農薬不使用栽培など積極的に取り組んでいる。</p> <p>○パルシステム生活協同組合連合会が定めた「農薬削減プログラム」と、農薬・化学肥料の5割以上削減とを組み合わせた自主基準を、「栽培基準委員会」で確立・管理している。</p> <p>○自主基準に基づく生産を徹底するため、生産者自身による「内部監査委員会」や、消費者・学識経験者等を監査人とする「公開監査制度」により、生産履歴の確認や情報公開を行っている。</p> <p>○パルシステムが取り組む青果残渣の一時処理たい肥を受け入れ、地域の家畜糞尿と組み合わせてたい肥を製造し、生産者への供給を行なっている。</p> <p>○消費者との交流会・農業体験等による環境保全型農業の啓発や、女性農業者の出前講座・地元小中学校からの体験学習受入れ等地域食育に資する活動も盛んである。</p>
<p>あいち海部農業協同組合 エコ部会 (愛知県 津島市)</p>	<p>野菜</p>	<p>3.5ha (23戸)</p>	<p>○ユニー(株)系列店舗から排出された食品残さと地域の家畜ふんの混合堆肥を利用した土づくりを行い、生産された農産物をユニー(株)系列店舗で販売する取組を行っている。平成20年現在で、部会員23名、出荷品目61品目、出荷先は7店舗である。</p> <p>○混合堆肥の肥料成分を考慮した施肥により、従来と比較して化学肥料施用量を43%低減している。また、混合堆肥による土づくり、生物農薬や防虫ネットを利用し、化学合成農薬の使用回数を43%低減している。</p> <p>○消費者交流会や即売会において、農産物に対する消費者の意見を部会員が直接確認し、鮮度の高い農産物を消費者に届けるためのコンテナ出荷など、可能な限り消費者のニーズに応えている。</p> <p>○農業者が地域の消費者、流通業者と、農産物や資源、情報でつながる都市近郊ならではの環境保全型農業の形態を創り上げている</p>
<p>福津農園 松沢政満 (愛知県 新城市)</p>	<p>水稻、野菜、鶏卵等</p>	<p>1.5ha</p>	<p>○昭和59年にUターン就農し、地域の先駆けとして有機農業を開始した。経営面積は1.5haで、全面積で有機農業を実施している。販売品目は少量多品目栽培のため、約200種類と多く、うち1次農産物(水稻、野菜、鶏卵等)が120種、加工品(切り干し芋等)が80種である。</p> <p>○農作物だけでなく、それを取り巻く雑草や虫など注意深く観察し、栽培方法を一から</p>

			<p>見直した結果、「土は草でつくる。草は草で、虫は虫で、菌は菌で制御する」という考え方にに基づき、立地条件、植生にあった栽培を行うことなど、有機栽培技術を確立した。</p> <p>○消費者とともに地域農業を考えることが重要であると考え、有機農業で栽培した農産物を豊橋市の朝市で販売し、都市部の消費者との交流を深めてきた。自らの農園も消費者に開放しており、多様な生物が生きる豊かな自然を求めて、多くの家族連れや団体が福津農園を訪れている(年間約1,000人)。</p> <p>○有機農業を研究関係、教育関係、一般消費者まで、幅広く紹介し、研修会講師や体験学習など積極的に活動したことで、有機農業を身近なものとして認知させ、愛知県をはじめとして、全国的な有機農業者のリーダーとして、有機農業推進に貢献している。</p>
<p>北びわこ農業協同組合 「プレミアム米」生産者グループ (滋賀県 湖北町)</p>	<p>水稻</p>	<p>1042ha (567戸)</p>	<p>○平成17年度に環境に優しく安全・安心なコメの生産を目的として組織され、平成21年度は567戸が1,041haで約4,400tのコシヒカリを生産している。</p> <p>○プレミアム米生産グループは、使用農薬の統一やGAPの実践など、独自の生産基準を設け、農協に区分集荷することにより、ブランド化を図っている。</p> <p>○販売先を地元店舗を持つ大手量販店と契約することにより、地産地消による流通コストの低減や輸送に伴うCO<sub>2</sub>削減にも貢献している。</p> <p>○慣行栽培に比べ化学合成農薬の使用成分数を50%以上削減し、使用する農薬はグループで申し合わせにより統一した毒性の低い薬剤7成分以内としている。</p> <p>○慣行栽培に比べ化学肥料を50%以上削減し、窒素は成分4kg/10a以下で栽培する。1.85mm以上の選別網を使用し、良品米仕上げをする。適正農業規範(GAP)を設定し、周辺環境への農薬の飛散や肥料成分等の流出を防止する技術や食品としての衛生面での実践チェックを定めリスク管理を行う。生産履歴の記帳とデータベース化をするとともに、出荷の際にはバーコードラベルを貼付し、出荷データを管理することにより、消費者へのトレーサビリティを行ってっている。</p> <p>○このように、プレミアム米として付加価値を高めることにより、収益性の改善を図っている。</p>

<p>紀ノ川農業協同組合 (和歌山県 紀の川市)</p>	<p>みかん・柿・キウイ・タマネギ・トマト</p>	<p>292. 2ha(922戸)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○農産物及び資材を取り扱う販売専門農協であり、1983年に設立された。和歌山県全域を組合の対象地区として922名の組合員で構成されている。前進である那賀町農民組合当時から生協との産直を約30年にわたって行っている。</li> <li>○取り扱う農産物全体の約6割が生協との産直販売を行っていることから、ほとんどの農作物について生協の基準である「化学合成農薬3割以上削減、化学肥料5割以上削減」に取り組んでいる。また、キウイでは1991年から化学農薬を使用しない栽培を始め、2001年には有機栽培に取り組み始めた。2003年以降は、みかんをはじめとする14品目で特別栽培の認証を受け、さらに2009年からモモでエコファーマーに取り組むなど、幅広い農作物で環境保全型農業に取り組んでいる。</li> <li>○土壌診断に基づく適正施肥や、有機質肥料を中心とした施肥を行うとともに、物理的防除や研修会等で得た知識を基にした適期防除を実行することにより、化学合成農薬・化学肥料の低減を実践している。また、生協との産直を通して消費者との信頼関係を深め、「農作物は生き物であり、農村の生態系の中から、多様な生き物とともに生み出される」との理念から、環境保全型農業の推進に努めている。</li> <li>○タマネギにおける除草技術として、他地域に先駆けて約20年前からマルチ栽培に取り組んでいる。また、トウモロコシと枝豆をコンパニオンプランツとして混植するなど、研修会で得た知識を積極的に実践している。</li> <li>○食育にも力を入れており、消費者に対する農業体験の実施や学校給食への食材提供を行っている。さらに、2008年から那賀地方有機農業推進協議会の事務局として、技術研修会や講演会などを開催し、那賀地域への有機農業の推進に努めている。</li> </ul>
<p>名残みどりの会 (福岡県宗像市)</p>	<p>水稲</p>	<p>19ha (会員55戸、うち農家12戸)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○低山の谷から広がった農地で稲、麦、大豆を中心とした農業が展開されている。宗像市全体に都市化が進展し、対象地域も周辺を大型住宅団地に囲まれており、住民と共生する農業を目指している。</li> <li>○水稲について化学合成農薬及び化学肥料を県基準の半分以下で栽培する技術を実践し、平成19年に集落内の全農家がエコファーマーとなり、平成21年には全水田で福岡県減農薬・減化学肥料栽培認証(化学農薬、化学肥料とも県基準の5割以下で生産)を取得している。</li> </ul>

			<p>○周辺住民と共に、平成19年に環境保全活動組織である「名残みどりの会」を設立し、農地・水・環境保全向上対策に取り組んでおり、農業者組織の農事組合が率先して交流会の実施、農村環境の整備、農業理解の促進を図っている。</p> <p>○都市近郊農業地帯として「水源を守る、住民の生活用水である河川を汚さない」、「安全な作物を生産する」をモットーとして集落全体で下記の取り組みを実施している。土作り・化学肥料の低減、稲わら、籾殻、米ぬか、麦わら、大豆ガラの土壌すきこみ、自家製堆肥の施用、土壌分析結果に基づく施肥、鶏糞、有機質肥料の使用をおこなっている。</p> <p>○田んぼの生き物調査、調査を踏まえた防除回数の低減、生き物を活用した除草(スクミリンゴガイ、カブトエビ等)、畦草刈、カメムシ忌避を目的としたハーブの植栽、本田の機械除草、温湯消毒の実施、種子の薄まき、疎植、減肥による健全な稲づくりを行っている。</p>
山都町有機農業協議会 (熊本県 山都町)	水稻、茶、野菜	96ha(123名)	<p>○この地域では、無農薬無化学肥料による農業生産が盛んな地域として全国に知られ、20数年前からいくつかの団体が活動していた。</p> <p>○平成15年には、無農薬無化学肥料栽培に取り組む10組織(123名)を構成員として、環境にやさしい農業の発展と農法の普及、農村環境の保全や農家経営の確立、さらには消費者との交流を目的に本協議会が設立された。本協議会は、営利を目的とせず地域社会や行政等とパートナーシップを図りながら環境保全型農業の推進に取り組んでいる。</p> <p>○無農薬無化学肥料栽培技術はそれぞれの構成組織で独自の技術が確立されている。</p> <p>○土づくりとして、主に牛ふん堆肥や、稲わら等の粗大有機物の鋤込みを実施、有機JASに適合する資材(たい肥)についての情報交換や各組織による共同購入、水稻の後作に、緑肥と景観の向上も兼ねてレンゲを植えている。</p> <p>○化学肥料施用量の削減として、油かす、魚粉の投入等有機質肥料を利用、組織によっては土壌分析による適正施肥を実施、硝酸態窒素の環境負荷について研修会を開催し、環境保全のため適正施肥に努めている。</p>

			○化学合成農薬の削減として、水稻及び野菜栽培では、畦マルチ、防虫ネット、フェロモントラップ、粘着坂、雨よけハウス、太陽熱消毒、粗植栽培、稲作の合鴨や鯉農法による減農薬減化学肥料栽培を実施、茶栽培では、茶樹の収穫後夏期の深刈り・浅刈りを実施している。
優秀賞(全国農業協同組合中央会会長賞)			
名称 (所在地)	対象作物	実施面積	取り組み概要
大原地区 邑づくり推進協議会 (福島県 富岡町)	水稻・大豆・ブロッコリ・カボチャ	24.7ha(45戸)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大原地区 邑づくり推進協議会は、富岡町大原地区の農家29戸と非農家16戸で構成され、農用地の有効活用や安全安心な米・野菜づくりを活動の柱とした環境保全型農業に地区ぐるみで取り組んでいる。</li> <li>○水稻の特別栽培にいち早く取り組み「有機物施用による土づくり」、「温湯種子消毒」、「プール育苗」等を導入した栽培体系を確立するとともに地域への普及拡大に中核的な役割を担った。これらの栽培方法は、JAふたばが作成した特別栽培米マニュアルに盛り込まれ、独自ブランド「ふたば舞」確立の原動力となっている。</li> <li>○全国でも先駆的な取り組みとなった「富岡町バイオマスタウン構想」実現の中心的役割を担い、町内で発生した食品残さから再生したコンポスト肥料の利活用や地元畜産農家の牛ふん堆肥の共同散布を行うなど、耕畜連携を実践している。</li> <li>○水田除草に利用した「アイガモ」は、水田から引き上げた後、共同池で飼育し、飼育コストの低減を図るとともに、地域住民への環境保全型農業のPRに活用している。また、アイガモ肉の加工品(肉団子、ソーセージ等)を農商工連携によって開発するなど、地域振興への貢献や農業所得の確保を図っている。</li> </ul>
農事組合法人 長畝生産組合 (新潟県 佐渡市)	水稻	71戸	<ul style="list-style-type: none"> <li>○昭和52年に任意組合として設立した後、昭和56年に法人化した。</li> <li>○水稻栽培のほぼ全面席で化学合成農薬および化学肥料を地域慣行栽培からそれぞれ5割以上低減した栽培に取り組むとともに、「朱鷺と暮らす郷づくり」認証制度に率先しており組んでいる(認証取り組み面積:66.4ha)。</li> <li>○土づくりは、稲わらの秋すき込みの実践のほか、地元JA和牛センターに籾殻を供給して製造された牛ふん堆肥を地力の低い圃場等へ還元する耕畜連携をしている。</li> </ul>

			<p>○消費者等への情報発信、交流の面では、自己の経営だけでなく佐渡地域全体の環境保全型農業の取り組みを情報発信するとともに、消費者と協力した田んぼの生き物調査や大学生の農業実習の受け入れ党の交流活動を行っている。</p>
<p>有限会社 ファーミング・スタッフ (新潟県 柏崎市)</p>	<p>水稲 等</p>	<p>45ha(3戸)</p>	<p>○当該法人は、平成2年の法人設立から現在に至るまで、20年間化学合成農薬・肥料を使用しない水稲栽培に取り組んでおり、平成13年に水稲の有機JASの認定を取得して以来、現在まで有機栽培を継続している県内でも先駆的な有機水稲栽培実践者である。</p> <p>○有機栽培ほ場では、周辺農業者から有機栽培に対する理解を得るため、地域農業への協力や、取組ほ場での病害虫予察などの情報を周辺農業者と共有に努めてきた。</p> <p>○有機農業技術力の向上にも積極的に取り組み、特に除草管理については除草機、米ぬか散布、疎植え、成苗植え、カモ導入など全国各地の技術を導入した結果、現在は様々な除草機の利用を主体として、雑草が萌芽する時期より早い4月下旬に成苗を移植する方法が当地域に最適として実践している。</p> <p>○肥培管理については、継続的な生育調査の実施により、過去の生育と比較しながら施肥量を加減することで、安定的な収量確保と病害虫が発生しにくい生育環境づくりを心がけている。</p> <p>○地域の小学校の学校田による食農教育や、米の販売先との提携により消費者交流を実施するとともに、田んぼの生き物調査・田んぼ周辺の環境調査などの環境教育活動も合わせて実践している。</p>
<p>JA京都園部支店 生産振興部会水稲部会 (京都府 南丹市)</p>	<p>水稲</p>	<p>96ha(166戸)</p>	<p>○平成2年に部会を設立し、取組を開始。早い段階から「環境にやさしい農業」に組織的に取り組み、栽培面積・生産量を年々拡大させてきた。</p> <p>○地域で発生する牛ふんたい肥の施用を基本とした栽培暦に基づき、特別栽培米の生産を展開。地域でまとまった大規模な取組を行っている。</p> <p>○地元のたい肥センターが生産する牛ふんたい肥を利用して、土づくりを行い水田の地力向上を図るとともに、地域に根ざした循環型農業を実現している。基肥はたい肥を利用し、追肥に有機配合肥料を利用する栽培体系を確立し、化学肥料由来の窒素成分を慣行栽培の半分以下に削減している。</p>

			<p>○温湯種子消毒、疎植・細植による田植え、耕種的防除の徹底、予察情報の活用により、化学農薬の使用回数を低減し、組織全体としてIPMを実践している。</p> <p>○生産される特別栽培米を「れんげ米」と名づけ、地域ブランド化。有利販売を展開し、経営の安定につなげている。</p>
<p>東大幸エコファーマーズ (徳島県 鳴門市)</p>	<p>れんこん</p>	<p>24.9ha(10戸)</p>	<p>○平成15年より、全会員が家族経営協定を締結し、家族連名でエコファーマーの認定を受けるとともに、徳島県独自の認証制度「とくしま安<sup>2</sup>(あんあん)農産物」の認証を取得し、「環境保全」と「安全・安心」をテーマに「エコれんこん」の栽培に取り組んでいる。</p> <p>○環境保全型農業技術として、土づくり(腐菌床堆肥を600kg/10a施用)、化学肥料の節減(作付前に土壌分析を実施するとともに緩効性肥料を利用した減肥栽培)を行い、慣行栽培に比べ、化学肥料の施肥量を約30%削減している。また、地域全体で性フェロモン剤を利用したハスモンヨトウの大量誘殺に取り組み、雑草は手で抜き取るなど、化学合成農薬の使用を2回(2成分)以下に削減している。</p> <p>○れんこんの腐敗病対策として県・JAが推進している太陽熱消毒の実証ほを地域で最も早く設置するなど、その技術の普及に貢献している。また、れんこんの品質低下の原因であるゆず肌症について、ゆず肌症発生ほ場の土壌を農業研究所に提供するなど、試験研究にも貢献している。</p> <p>○会員が率先して畦畔の除草や草焼き、藻切り、泥上げ、バラス入れ(道路整備)などの共同作業を行っており、れんこん田や周辺の用水路には多くの水生植物が生息している。</p>
<p>三間町特別栽培米生産組合 (愛媛県 宇和島市)</p>	<p>水稲</p>	<p>21ha(20戸)</p>	<p>○平成元年から、水稲「コシヒカリ」「あきたこまち」の無化学肥料減農薬栽培に取り組んでいる。</p> <p>○肥料は基肥で発酵鶏ふんを主体に使用し、穂肥はえひめ有機100(有機100%)を使用している。除草剤は初期の1回散布のみである。病虫害防除は、田植時に育苗箱の箱施用剤、本田では、出穂後1回散布のみである。冬場に堆肥を投入し、土づくりをしている農家もある。肥料は基肥で発酵鶏ふんを主体に使用し、穂肥はえひめ有</p>

			<p>機100(有機100%)を使用している。除草剤は初期の1回散布のみである。</p> <p>○病虫害防除は、田植時に育苗箱の箱施用剤、本田では、出穂後1回散布のみである。冬場に堆肥を投入し、土づくりをしている農家もある。</p> <p>○収穫した米は乾燥した後、玄米の状態冷蔵保存している。冷蔵庫は組合員の農家全員が貯蔵用の冷蔵庫を設置している。米は発送直前に精米し、お米の状態を厳重にチェックした後、販売先(スーパー等)に出荷している。個人販売先については郵パックにて100%三間産のコシヒカリ(あきたこまち)を郵送している。</p>
<p>あまくさ農業協同組合 花き部会 トルコギキョウ専門部会 (熊本県 天草市)</p>	<p>トルコギキョウ</p>	<p>2.6ha (8戸)</p>	<p>○減農薬・減化学肥料栽培の取り組みが少ない花き(非食用農産物)栽培の中にあつて、いち早く平成14年に部会全員がエコファーマーの認定を取得し、その後も積極的に環境保全型農業の推進に取り組んでいる。</p> <p>○エコファーマーになることで、部会員の環境への配慮など、更なる意識の向上に繋がることとなった。特に、花きでのエコファーマー取得は全国的にも珍しく、先進的事例として、各マスコミにも取り上げられ、その取り組みと意識が高く評価された。</p> <p>○循環扇や、黄色防蛾灯、防虫ネット等の導入により、病虫害の発生が少なくなり農薬の散布回数が削減できた。</p> <p>○周辺への影響としては、ELFバケットによる出荷が、天草地域の他の花(宿根カスミソウ、キンギョ草等の草花)へも導入が進み、県下全域にも波及している。また、太陽熱消毒、黄色防蛾灯、循環扇が、天草管内の他の花栽培でも導入され、循環扇については、花きのみでなく、施設園芸全般にも普及している。</p>
<p>優秀賞(全国環境保全型農業推進会議会長賞)</p>			
<p>名称 (所在地)</p>	<p>対象作物</p>	<p>実施面積</p>	<p>取り組み概要</p>
<p>紫波町 (岩手県 紫波町)</p>	<p>水稻、果樹 等</p>	<p>1,050 ha (3,102戸)</p>	<p>○紫波町は、平成12年に循環型社会の構築に向けた計画を立案するため、「環境新世紀」イベントを開催し、町民や専門家による話し合いや提案が行われ、町長が「新世紀未来宣言」を発表した。</p> <p>○平成13年6月に「紫波町循環型まちづくり条例」を制定し、「今の環境を保全し、創造し、百年後の子供たちに確実に引き継ぐ」ことを目標として、行政と住民が一体となつ</p>

			<p>た「循環型まちづくり」に取り組んでいる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○農業・畜産業や森林資源のほか、家庭や事業所から排出される生ごみなどの有機資源を含め、町のあらゆる有機資源を循環活用する取り組みを進めている。そのひとつとして、有機資源循環施設「えこ3センター」で、生ごみと家畜排泄物との併せ処理によるたい肥を製造し、良質な土づくりを進め、農産物・農業の紫波ブランド化を推進している。</li> <li>○水稻及び果樹で、減農薬栽培や特別栽培に取り組んでおり、たい肥化した有機資源を活用した環境保全型農業を実践している。</li> <li>○町独自の農産物登録制度により、土づくりに取り組む生産者の農産物を消費者にPRし、差別化販売につなげている。</li> <li>○紫波町食育推進計画を策定し、地産地消による学校給食を推進している。平成20年の実績では、穀類100%、野菜22%、果樹37%が町産農作物利用となっている。特に米では、給食残渣→堆肥→土→特別栽培米→給食という循環を実践している。</li> </ul>
<p>有限会社 大和農園 (秋田県 能代市)</p>	<p>ねぎ、ながいも、 チンゲンサイ・ほう うれんそう、こまつ な</p>	<p>露地 5.0ha, 施設 延べ9.58ha</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○有限会社大和農園の大塚氏は、昭和57年の就農当初から、堆肥と海草・カキガラ等の独自の有機肥料を投入した土づくりを行い、ハウス内では、木酢液やニンニクエキスを散布する等害虫が寄りつかない工夫をこらし、安全へこだわった野菜生産を行っている。</li> <li>○耕作地は、松林だった地力や保水力の小さい砂質土壤に、土壤改良資材や有機物を投入し、試行錯誤を繰り返しながら土壤改良を実施してきた。また、毎年土壤分析を実施し、土壤改良資材や肥料の過剰投入を防止している。ハウス栽培、露地栽培ともに輪作を取り入れることにより土壤病害の回避を図り、化学農薬の低減を実現している。出荷の際は生産履歴を提示し、特別栽培農産物の認証やエコファーマーの認定も得ている。また、JGAP認証取得に向けて、JGAP指導員資格を取得している。</li> </ul> <p>露地栽培のネギやナガイモ、ハウスにおけるチンゲンサイやほうれんそうの輪作周年栽培において、砂質土壤における窒素質肥料の利用効率を高める栽培法を確立し、周辺へと波及させている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○「大いなる自然に活かされていることに感謝し、和を想像する農企業になる」を合い</li> </ul>

			<p>言葉に、平成3年に有限会社「大和農園」を設立、その後平成13年に民営直売所として有限会社「ねぎっこ村」を設立し、環境に配慮した農業を展開している。また、直売所の参画農家にも、安全・安心な農産物生産の考え方が広がっている。</p> <p>○能代山本直売連絡協議会の幹部として、直売所会員のエコファーマー取得の推進を図り、管内で146名の直売所出品者エコファーマーが誕生している。</p>
<p>逆面エコ・アグリ<sup>II</sup> (栃木県 宇都宮市)</p>	<p>水稲</p>	<p>71.2ha(32戸)</p>	<p>○平成20年より、生きものと農村の共存をめざしてフクロウを「地域のシンボル」と位置づけており、フクロウが生息できる優れた生態系の保全と向上を図るため、全構成員はエコファーマーとして化学肥料と化学合成農薬の使用量を県慣行水準の5割以上低減している。なお、こうした取組により栽培した農作物を「生きものブランド米(フクロウ米)」として商品化することにより、環境保全に着目した農業振興につなげている。</p> <p>○地域内の畜産農家と連携し、牛ふんたい肥を活用した土づくりに取り組んでいる。また、秋季に稲わらすき込みを行うところでは、腐熟化を促進させるため深耕や発酵鶏ふん施用を行っている。</p> <p>肥効調節型肥料や側条施肥など、効率的で省力的な施肥体系の導入により化学肥料の節減に取り組んでいる。また、水稲種子の温湯消毒や適正な水管理、耕種的防除技術の導入により化学合成農薬の低減に取り組んでいる。</p> <p>○上記の取り組みは、慣行栽培よりも資材費を10,800円/10a節減することが出来る。</p> <p>○初めて化学肥料・化学合成農薬の低減に取り組む構成員に対しては、指導者的立場にある農業士が個別指導を行っている。また、生産履歴の記帳について、構成員全員で相互確認しながら実施しており、全員が連携しながら高い意識をもって取り組んでいる。</p>
<p>与謝野町 (京都府 与謝野町)</p>	<p>水稲・野菜</p>	<p>110ha</p>	<p>○平成7年に環境保全型農業推進方針を策定し、化学農薬の低減と有機物の還元・循環による環境に配慮した農業の展開を農業施策の基本として推進している。</p> <p>○自然循環農業の構築と推進に向け、①企業誘致、②原料確保、③肥料製造、④肥料の利用と普及、⑤地域環境の保全、⑥販路拡大、⑦食育や地産地消と一貫した取組</p>

			<p>や施策を推進している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○町内の豆腐工場から出る‘おから’を主原料に米ぬか、魚のアラを混合・発酵させた有機質肥料「京の豆っこ」を製造するとともに、その分解特性調査や作物への施用試験を関係機関と連携して行い、本肥料の水稻と施設園芸に対する施用マニュアルを作成し、水稻、施設野菜への利用を推進している。</li> <li>○「循環」の実現に向け、豆腐原料である大豆の生産振興を図るため、豆腐製造に適し、機械作業に向いている品種を選定し、生産条件の厳しい日本海側で、生産性の向上と農業者の所得安定を確立した。現在では約11ha、収量30tと府内で最大の大豆産地を形成している。</li> <li>○「京の豆っこ」肥料を使用したお米を「京の豆っこ米」としてブランド化を図っており、平成15年には、化学肥料、農薬を5割減らした特別栽培米「京の豆っこ米」を生産する部会を設立し、環境に配慮した米作りを推進している。</li> <li>○日本三景の「天橋立」を形成している「阿蘇海」の水質悪化を軽減するため、農業分野からの環境保全活動にも取り組んでいる。具体的には上述した自然循環農業の推進のほか、畔塗りの徹底や浅水代かき等で、田植え時に濁水を流さないように普及・啓発を進めている。</li> </ul>
梅実 一夫 (鳥取県 鳥取市)	水稻	7. 3ha	<ul style="list-style-type: none"> <li>○平成元年より開始している。有機認証を13年に取得して。</li> <li>○効率的除草技術など高い農業技術を有し、大規模な有機米栽培を確立している。また、自家産有機物に菜種油粕、魚粉を混ぜた独自のEMぼかしをつくり、土づくりや資源リサイクルに努めている。</li> <li>○農商工連携により開発・販売されている有機農産物加工酒類が県内外及び海外で高値で取引されており、原料である有機酒米の需要が安定し収益性の高い安定経営を確立している。</li> <li>○有機農業に意欲のある新規農業者を育成するとともに、地域の有機農業への取組意識の向上、有機米栽培農家の育成・指導等積極的な活動を続けている。</li> <li>○本人及び家族・知人の病気や体調不良から学んだ、食べ物の大切さの認識は揺るぎなく、消費者の信頼と要望に「安心でおいしい米」で真摯に応えることを信条とし、い</li> </ul>

			かに多忙な時も消費者等と交流を図り、豊かな人間関係を築こうとしている。
中島農産 中島宗昭 (福岡県 大木町)	養豚・米・麦・アスパラガス	7.3ha	<p>○畜産複合経営の専業農家で、養豚は、昭和35年頃に父の代に米麦の屑を飼料の主体として繁殖豚3頭を自家交配で飼育したのが始まりであり、その後規模拡大を図り、母豚60頭の繁殖肥育一貫経営を経て、現在は、夫婦と雇用2人の労力で全農ふくれんより委託を受けたSPF(「特定の病原体をもっていない」という意味の学術用語)豚2,162頭の肥育に取り組んでいる。</p> <p>○堆肥を使った無農薬栽培・無化学肥料栽培等の米、麦及び野菜(米:6.7ha(うち合鴨米1.2ha)、小麦:4.2ha、アスパラガス18a)、さらには遊休農地を活用したふれあい農園15aを設けるなど、全ての農地で堆肥を活用した環境に優しい農業を実践している。</p> <p>○当地域では、家畜ふん尿の有効利用と畜産経営の安定を図るため、堆肥舎等の処理施設の整備・改善に取り組んできたが、畜舎排水や尿処理水によるクリーク水の窒素過多、家庭の雑排水によるクリークの汚染の問題等、地域における新たな課題も発生していた。このような状況の中で、地域環境改善を主体とした地球環境にやさしい農業の定着と地域資源(きのこの菌床栽培後のオガクズ、家畜のふん尿)を活用した資源循環型農業の実践にいち早く取り組み、堆肥を活用して化学肥料を極力減らした合鴨米等を展開され、今年で17年となる。</p> <p>○小麦では、製粉会社と契約して合鴨米裏作での無農薬・無化学肥料小麦を栽培しており、製粉会社が石臼で引き、小麦粉を販売している。</p>
夢咲茶屋生産者部会 (大分県国東市)	農産物全般	10ha(250名)	<p>○平成6年より本地域の直売所である「(有)夢咲茶屋」に農産物を出荷する「生産者部会」が、直売所と一体となって環境保全型農業に取り組んできた。</p> <p>○平成14年、生産者部会で特に環境保全型農業に対する意識の強い農業者が「夢咲夢咲あんしん農産物生産組合」を組織し、より高度な環境保全型農業(殆どが有機農業)を実践している。生産された農産物は、(有)夢咲茶屋を通じて消費者に届けられ、「安全・あんしん農産物の地産地消」をコンセプトとする(有)夢咲茶屋の発展にも貢献している。</p> <p>○独自の環境保全型農業認証制度「夢咲あんしん農産物」認証制度の認証農産物は</p>

			<p>「国東町学校給食安全・安心農産物供給推進協議会」を通じて地域の学校給食にも供給されている。</p> <p>○生産者部会員は、土づくり等により化学肥料・化学合成農薬の節減に努めている。特に、夢咲あんしん農産物生産組合員の生産する農産物は化学肥料不使用に加え、IPMの実践等により95%が有機農産物と同等の農産物である。加えて、平成20年から、夢咲あんしん農産物生産組合はGAP、(有)夢咲茶屋はHACCPの取り組みを導入した。生産者と販売者が連携し、農産物等の商品の安全性を向上させることが、消費者からの信頼性の確保に繋がっている。</p> <p>○農産物のマーケティングに対しては、直売所での声かけ等により消費者動向を掴むよう努力しつつ、様々なイベントにも積極的に参加している。</p>
--	--	--	--

優秀賞(有機農業推進委員会会長賞)			
名称 (所在地)	対象作物	実施面積	取り組み概要
津別町有機酪農研究会 (北海道 津別町)	生乳(酪農経営)	184ha (5戸)  258.5ha (7戸) (転換期間中を含む)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○平成12年から有機酪農を目指して取り組み、平成18年に全国で初めて有機畜産物のJAS認定を取得。生産した生乳は、大手乳業メーカーを通じ日本初の有機JAS格付けのオーガニック牛乳として流通している。</li> <li>○飼料自給率100%を目指し、家畜ふん尿の有効活用など化学肥料・化学合成農薬に頼らない資源循環を基本とした独自技術による自給飼料の生産に取り組んでいる。</li> <li>○ふん尿の浄化対策をはじめ、農場HACCP手法の実践による適切な衛生管理等、地域における環境にやさしい農業の普及推進に大きく寄与するとともに、酪農教育ファームとして酪農体験を積極的に受け入れるなど、食農教育等の活動にも貢献している。</li> <li>○有機農業技術の実証と導入、大手乳業メーカーを通じたオーガニック牛乳のブランド化、有機牛肉生産の取組、先進諸国の視察調査等、意欲的な取り組みが全国的に注目評価されており、有機酪農経営に対する先進事例としてモデル的な存在が、国内有機酪農経営の普及拡大に影響を与えている。</li> </ul>
福士 武造(青森県 青森市)	水稻	4.5ha	<ul style="list-style-type: none"> <li>○平成6年から農薬や化学肥料を使用しない安全・安心な農産物の生産を目指し、水稻有機栽培の取組を始め、平成13年に有機JASの認証を取得している。</li> <li>○有機栽培では、稲わらの全量すき込みと発酵鶏糞による土づくり、自家製ぼかし肥料と市販有機質肥料を用いた施肥管理を行っている。また、雑草抑制対策として、田植え後の深水管理や機械除草など効率的な除草・抑草技術を組み合わせ、手取除草の軽減に努めている。</li> <li>○水稻以外に、りんご、大豆の特別栽培農産物の生産や省力化・機械化を目指した不耕起V溝直播及び田畑輪換の確立にも積極的に取り組み、大きな成果を挙げている。</li> <li>○特別栽培で生産された大豆は、地元の加工グループによる味噌や豆腐等で加工・販</li> </ul>

			売(地産地消)されており、また、農作業体験を通じた地域の子供たちの食育活動にも貢献している。
愛農学園農業高等学校 (三重県 伊賀市)	水稲・野菜・果樹	3. 15ha (生徒数66人)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○農業教育の柱を「土づくりを中心とした有機農業教育」としており、有畜複合経営による有機農業を学ぶことができる高校である。</li> <li>○S60年度から本格的に有機農業に転換し、学校内全体が有機農業の実践の場となっている。</li> <li>○校内での食料自給率は70%となっている。</li> <li>○土づくりに重点を置き、堆肥の発酵についてはそれぞれの作物にあった菌についての研究が進められている。</li> <li>○農薬を使用しないための手法として、あらゆる技術の導入を行い、またその実践・研究が行われている。</li> <li>○校内資源の循環利用に努めており、家畜排泄物の利用はもとより、食品残渣、廃食油も利用している。また環境にやさしいエネルギーとして太陽光発電の利用を行っている。</li> <li>○卒業生の44%が農業関係に従事しており、全国的にみて非常に就農率が高い。有機農業に携わっている者も非常に多い。</li> </ul>
有限会社 屋久島八万 寿茶園 (鹿児島県 屋久島町)	茶	6. 53ha	<ul style="list-style-type: none"> <li>○有限会社屋久島八万寿茶園は、生まれ育った屋久島の自然・景観環境を維持しながら、環境にやさしく、人にやさしい産業として成り立つ農業経営を目指して、農業にゼロから取り組むとともに、有機栽培による茶業経営に昭和60年から取り組んでいる。</li> <li>○茶園は、2年かけて耕作放棄地を造成・新植し、成園化までに7年間を要した。また、製茶工場は、平成4年に完成し稼働している。</li> <li>○毎年度、園地周辺のカヤなどの山野草を刈り取り、カッターで小さく粉砕したものを、全園地に敷き草として活用し、土づくりに努めている。</li> <li>○茶の重要害虫であるクワシロカイガラムシ防除に当たっては、主に屋久島特有の年間大量に降る雨を生かしつつ、スプリンクラーかん水により卵を腐敗させる防除技術を実践しているほか、樹勢が旺盛で、病気等に強い品種の導入を積極的に進めている。</li> <li>○地域では、有機農業のトップリーダーとしての地位を確立しており、特に茶について</li> </ul>

			は、自身の外に既に3戸が13haで有機農業に取り組むなど他の見本となっている。
奨励賞			
名称 (所在地)			
峰延農業協同組合 香りの畦みちハーブ米生産部会 (北海道 美唄市)	水稲	122ha (267戸)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○平成11年よりカメムシ食害対策として畦畔ハーブ栽培による環境保全型農業の導入、北海道産クリーン米のブランド確立を目指して取り組んでいる。</li> <li>○平成16年には、北海道独自認証制度のYES！clean登録集団となり、JA傘下の水稲生産部会として、環境に配慮したクリーン農業技術の導入、化学肥料・化学合成農薬の削減に努め、北海道産クリーン米のイメージアップと地域ブランド化に取り組んでいる。</li> <li>○行政支援による道道・用水路等へのハーブの作付拡大を図りながら、意欲的な景観推進活動の取り組みを道内はもとより全国に向け情報発信している。</li> </ul>
JA山形もがみ園芸生産組合 トマト部会 (山形県 大蔵村 鮭川村、戸沢村)	トマト	568ha (29戸)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○平成11年より「健康な野菜は健康な土から！」をモットーに農地の生産力を維持・増進していく「ミネラルトマト」と呼ばれる栽培に取り組み始めた。</li> <li>○地域内の土づくりセンター等より供給される堆肥、籾殻、きのこの廃菌床等、多様なバイオマス資源を積極的に活用している。</li> <li>○環境負荷軽減のため、灌水と同時に毎日少しずつ必要な分だけ施用する灌水同時局所施肥を行っている他、新たな農薬散布量軽減の取組みとして、従来よりも農薬付着効果が高いといわれている静電噴口の導入を行っている。</li> <li>○良質な完熟堆肥の施用、微生物農薬の導入やUVカットフィルム、粘着トラップ等の耕種的防除を組み合わせた総合防除体系により、病害虫の蔓延を未然に防いでいる。</li> </ul>
大洗町水田農業担い手組合(茨城県・大洗町)	水稲, 飼料用稲	10ha (10戸)	<ul style="list-style-type: none"> <li>○水田が比較的肥沃なため、畑作で主に利用する有機入り低度化成肥料(有機S400:有機52.5%、どきどき有機:50有機)を統一資材として使用し、化学合成肥料の5割削減に努めている。</li> <li>○飼料用稲の栽培面積は50～60ha規模で県内の約2割を占め、約1,350トンの飼料を畜産農家に供給している。一方畜産農家からは堆肥を提供してもらっており、循環型農業である耕畜連携の取り組みを行っている。</li> </ul>

			<p>○その他、水稲の種子消毒や畦畔の雑草防除に刈り払い機やバロネスを活用するなど、機械除草を取り入れることで除草剤の使用削減に努めている。</p> <p>○生産された特別栽培米コシヒカリは、地元の児童・生徒に安全・安心で美味しい米飯または米粉パンに加工され給食に利用されており、地域の食農教育と地産地消を担う重要な取り組みとなっている。</p>
<p>嬭恋村環境保全型農業推進協議会（群馬県嬭恋村）</p>	<p>夏秋キャベツ</p>	<p>2,362ha (602戸)</p>	<p>○当協議会は、平成7年に嬭恋村の環境保全型農業を推進する目的で組織された。農家の大小、系統・商系を問わず、村内の農業者すべてを網羅できるよう村役場やJAを中心に、肥料商、農薬販売店、試験場や普及などの県関係機関および各地区の生産団体の役員が構成員となって活動している。</p> <p>○農薬の適正使用への取り組みとして、講習会の開催や残留農薬の自主検査、キャベツをはじめとする村内の主な品目への農薬情報の提供を行っている。また特徴的な取組としては、収穫間近になったほ場に旗を立てて農薬のドリフト防止について周囲に注意を促す「黄色い旗運動」の実践をしている。</p> <p>○畑の表土流失を極力抑えるため、圃場下部に芝や牧草による「グリーンベルト」を設置している。グリーンベルトは、表土流失が懸念される地区に計画的に設置され、全生産者で設置経費を「とも補償」するシステムを構築し効果的に推進している。また作物収穫後の圃場にはエン麦野生種を播種し、土壌流失防止やネグサレセンチュウの耕種防除に役立てるとともに、晩秋には鋤き込んで緑肥としても活用している。</p> <p>○性フェロモン剤を設置し、コナガの交信かく乱を行い、化学農薬を削減した栽培に取り組んでいる。その設置面積は、500haで、他に例を見ない規模となっている。フェロモン剤を利用した圃場では、有機質肥料を利用した減化学肥料と堆肥等による土づくりにも取り組み、「こだわり栽培キャベツ」として販売している。</p>
<p>くらしの里生産者組合（埼玉県・吉川市）</p>	<p>水稲</p>	<p>300ha (14戸)</p>	<p>○籾殻、米ぬか等の地域資源や事業者及び消費者から発生する食品廃棄物を原料としてサイクルセンターで製造される堆肥の活用等リサイクルシステムの確立に貢献し、農業と食品リサイクルシステムの構築に積極的に取り組んでいる。</p> <p>○従来、水田の耕うんはロータリーにより行っていたが、プラソイラーやバーチカルハーローを導入することで、低燃費作業体系を確立し環境への負荷の低減を図っている。こ</p>

			<p>これらの作業機を使用することにより、軽油使用量は従来の1/2～1/3に減らすことが実現され、温暖化の原因となっている二酸化炭素の発生量削減とあわせて、近年の原油価格高騰による経費の増加を抑制している。</p> <p>○消費者の信頼を得るための裏づけとして、平成18年にGAP・HACCPへ取り組むことを決めた。平成20年には、国庫補助事業「安全安心農産物確保対策推進事業」【GAP実践事業】を活用し、K-GAPマニュアル(くらしの里ジーエーピー)を作成・実践している。</p>
<p>有限会社鳥居原 (神奈川県 相模原市)</p>	<p>トマト・ナス・ ダイコン・ハクサイ</p>	<p>9ha (38戸)</p>	<p>○平成9年組織結成し、神奈川県北部の中山間地における露地野菜を主とした多品目作物生産を行い、周囲の景観を観光資源に共同直売を実施している。</p> <p>○堆肥の適正利用等による土づくりや地域特性を生かした落ち葉の堆肥化、土壌診断に基づいた土づくりによる土壌の改善及び化学肥料の2割削減をしている。</p> <p>○防虫ネット、銀色または黒色マルチの使用、フェロモントラップを用いた発生予察、環境に優しい農薬の選択、合理的な輪作体系の導入、物理的方法を用いた除草による病害虫温床の撲滅などの環境に優しい病害虫防除法の導入により化学合成農薬の慣行比5割削減をしている。</p>
<p>農事組合法人 た・から (山梨県 中央市)</p>	<p>野菜、米</p>	<p>34ha (130戸)</p>	<p>○兼業化や遊休農地の増加が目立っていたが、消費者の多い立地条件を活かそうと、環境保全型農業の取り組みを軸に、安全・安心な農産物の直売を通じて産地の活性化を図るべく、平成18年に経営構造対策事業を導入し農産物直売所「た・から」を整備した。</p> <p>○慣行栽培より30%以上の化学肥料、化学農薬低減栽培に取り組む農家を認証する県独自制度である「甲斐のこだわり環境農産物」の認証を得る農家も増えるなど、組合員が積極的に低減栽培に取り組んでいる。</p> <p>○中央市ブランド米普及促進協議会を発足し、県奨励品種ヒノヒカリを用いて、堆肥投入による土づくりや温湯種子消毒などを用い化学肥料、化学農薬を50%低減した特別栽培農産物として、直売所のほか地元スーパーでも販売を始めている。</p> <p>○稲作農家と畜産農家が連携し、平成17年度に市内に整備した高品質堆肥製造施設から年間100tを超える堆肥が供給され、組合員の土づくりに活用されている。また、</p>

			<p>稲作農家は飼料稲を生産しホールクロップサイレージとして畜産農家に供給するなど地域循環型農業が展開している。</p>
樽井 隆之 (静岡県 浜松市)	茶	5.85ha	<p>○平成13年度に有機JAS認証取得し、有機JAS農産物という強みを生かした販売戦略を行っている。従業員等に有機JASの意識を持たせ、生葉生産から製造加工、流通販売に至るまで、徹底した農産物の管理を実施している。</p> <p>○地域でも取組がほとんど見られない平坦地での茶の有機農業を確立し、独自の茶業経営を発展させてきた。</p> <p>○刈り落とし枝葉や草をほ場内に還元させることにより、土壌物理性の改善に取り組んでいる。また、肥料業者との連携による独自の有機質配合肥料を主体に、有機質肥料の分解速度を考慮した施肥体系を組んでいる。</p> <p>○土着天敵を活かし、化学合成農薬を使用しない防除体系を確立している。</p> <p>○有機栽培により特徴が発揮される在来品種の作付けを拡大している。</p> <p>○有機茶という強みを生かし、差別化商品による積極的なマーケティング活動を展開している。</p>
農事組合法人 NAセンター (富山県 魚津市)	水稲	107ha 1戸 (出資戸数73戸)	<p>○魚津市でいち早く水稲の減化学肥料栽培に取組み、これを契機に『魚津市農協環境保全米協議会(H19.12設立、47経営体、会長:NAセンター組合長が就任)』が設立され、エコファーマーの育成や技術確立が一層促進されるなど魚津市の環境にやさしい農業の普及拡大と魚津産米の販売力向上が図られている。</p> <p>○化学肥料は、堆肥散布(1t以上/10a)や稲わらの全量すき込みにより地力を向上させ、土壌診断に応じた施肥量を、側条施肥し、利用効率を高めるとともに定期的な生育調査による過剰な追肥の抑制により、減化学肥料栽培では、慣行より52%削減(N成分)している。</p> <p>○病虫害の防除は、温湯種子消毒の実施や草刈等の徹底とともに、畦畔被覆植物(草種:センチピードグラス等)の植栽によりカメムシ密度を抑制し、また、雑草や病虫害の発生状況を定期的に把握した適期防除により、成分回数で慣行より50%削減している。</p> <p>○耕作放棄地については、法人が主体となり再生・有効活用を計画しており(「耕作放</p>

			<p>棄地再生利用緊急対策」の事業申請中)、現在は、法人の営農活動の一環として、周辺のは場と一体的に草刈りを実施する等、景観の保全に努めている。</p>
<p>小松市農業協同組合          米部会          (石川県 小松市)</p>	<p>水稲</p>	<p>147ha          (106戸)</p>	<p>○平成8年には小松市農業協同組合米部会が創設され、組織的に減化学肥料、減化学合成農薬による水稲生産を行うとともに、生産されたコシヒカリを「蛍米」と銘打ち、そのブランド化と生産量の拡大を推進している。</p> <p>○水・緑・土等の環境変化が生態系や生物多様性に大きな影響を与えていることを、地域住民に実感してもらうために、米部会員をはじめとした農業者が、水路の生物調査、ため池の外来種オオクチバス駆除、米観察会や生育調査等を実施し、生態系の保全、集落の景観形成に努めている。</p> <p>○土づくり、施肥、防除方法、栽培地域、ライスセンターの指定をはじめ、圃場への看板設置が義務付され、生産者はエコファーマーであることが条件である、「蛍米」栽培要領には詳細な栽培基準が示されている。さらに、米部会員等による圃場巡回を実施し、「蛍米」として認定すべきか否かの審査も行っている。</p>
<p>吉田郡農業協同組合          (福井県 永平寺町)</p>	<p>水稲</p>	<p>866. 5ha (1, 266          戸)</p>	<p>○地力増進作物としてレンゲを作付け→すき込み→水稲を作付けすることにより、レンゲの肥効を活かした基肥(化学肥料)を使用しない米づくりによるもので、粒が大きくつややかな特徴がある「れんげ米」を生産している。</p> <p>○平成18年10月に、管内農業者の協力を得て、「れんげ米」の実証圃50aを設置し、平成19年産の特別栽培米の作付面積は約16haであった。その後、平成20年産から無農薬・無化学肥料栽培による「れんげ米」を本格的に普及推進してきた。(特別栽培米の作付面積:H20年約34. 7ha、H21年:38. 8ha)</p> <p>○米ぬかペレットによる除草や栽植密度を下げる(50株植え/坪)ことによりイモチ病の予防を図り、また、福井市への安全な飲み水を提供するとともに、中干し延期等によるカエル、トンボ等の豊かな生物群を保全することで、カメムシなどの害虫のトータル的な防除を行うため、節減対象農薬、化学肥料(窒素成分)ともに不使用の「れんげ米」や、節減対象農薬、化学肥料(窒素成分)ともに5割以上減等の特別栽培米を推進してきた。</p>

<p>田畑 正一郎 (福井県坂井市)</p>	<p>水稻</p>	<p>1ha</p>	<p>○昭和22年から有機農業で米づくりを実践する傍ら、常に新しい技術に率先して取り組み、地域はもとより、県内の有機農業者に対する技術指導者として先導的役割を果たしてきた。</p> <p>○平成12年から始まった有機JASの申請登録件数は、県全体で47件(67ha)であるが、そのうち田畑氏の指導によるものが39件(32ha)と約8割を占めるなど、福井県内の有機農業の発展に大きく寄与している。</p> <p>○人の健康のために有機農産物を消費者に食べてもらおうと、平成11年から消費者との交流会を開催し、消費者の有機農産物に対する意識向上を図っている。</p>
<p>有限会社 まんま農場 (岐阜県高山市)</p>	<p>水稻</p>	<p>23ha (1法人)</p>	<p>○第二種兼業農家3名と畜産専業農家1名の計4名により平成17年に設立された農業生産法人である。</p> <p>○山間高冷地である高山市上宝町は、1筆ごとのほ場面積も小さく、高齢化、過疎化による担い手不足から、農地の維持管理が困難となっており、耕作放棄地が増加しつつあった。「農地の荒廃を防ぎ、豊かな自然や農村の原風景を守りたい」という熱い思いから、水稻受託経営に取り組み始め、灌木の生えた耕作放棄地の復田も自ら行うなど、現在では地域内水田面積の約1/3を担っている。</p> <p>○構成員でもある飛騨牛肥育農家から自家生産される素性の確かな完熟堆肥と、自ら実施している水稻栽培、精米過程で発生する稲わら、もみ殻、米ぬかを利用した土づくりで循環型農業を実践している。</p> <p>○天然無機物及び有機物から製造された有機質肥料を使用し、化学肥料(窒素成分)は不使用である。また、土壌診断に基づく施肥量の適正化や側条施肥田植機による肥効効率の向上を図っている。化学合成農薬の使用回数(成分回数)は、適期防除により必要最小限の5~6回で、慣行レベル24回の約1/4程度まで抑えている。また、無農薬の米を食べたいという消費者ニーズに応え、一部ほ場では化学合成農薬不使用の栽培にも取り組んでいる。</p>

<p>田光資源と環境を守る会 (三重県 菰野町)</p>	<p>大豆、稲</p>	<p>31ha (83戸)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○農地・水・環境保全向上対策を契機として平成19年に設立された団体であり、認定農家、田光転作営農組合が中心となり、地域農業のあり方を考えながら、環境に配慮した農業に取り組んでいる。</li> <li>○大豆では、麦わらすき込みによる土作り、県研究機関と肥料メーカーで共同開発された鶏糞ペレットの使用及び中耕培土や機械除草の実施により化学肥料や農薬を使用しない農業を実践している。</li> <li>○化学肥料や農薬を使用せずとも、基本管理を徹底し、県の平均反収より多い収量を確保している。</li> <li>○地域が一体となった営農活動、子供の食育体験・学校給食への導入、地域住民との交流が進められており、環境を考えた食を中心に地域の振興が行われている。</li> </ul>
<p>京やさい佐伯 代表 佐伯昌和 (京都府 京都市)</p>	<p>野菜</p>	<p>0.7ha</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1978年に就農。徐々に化学肥料、農薬の使用削減に努め、1999年から有機農業を実践している。</li> <li>○消費者のニーズに対応するため、少量多品目栽培(約70品目)を実践し、自宅前での直売を中心に販売。消費者と顔の見える関係を築いている。</li> <li>○土づくりには牛ふんたい肥の利用を基本に鶏ふんや緑肥を活用、遺伝子組換えでない圧搾油かすや天然資材100%の有機質肥料を追肥に利用するなど、使用する資材一つ一つにこだわり、化学肥料に頼らない栽培技術を実践している。</li> <li>○少量多品目栽培を実践するため、「反射光利用防虫マルチ」や「銀色防虫テープ」「コンパニオンプランツ」など、品目毎に様々な資材の利用や多様な技術を駆使し、病害虫の低減を図っている。</li> <li>○京滋有機農業研究会の初代副会長として、会の立ち上げや運営に寄与し、専門家や有機農業を志向する他の農業者との交流を通じた情報収集や技術研鑽により、自己の持続的な経営の確立と有機農業の普及、併せて市街地農業の活性化に大きく貢献している。</li> </ul>

<p>農園 杉・五兵衛 (大阪府 枚方市)</p>	<p>野菜・果樹・水稲</p>	<p>5ha</p>	<p>○就農当初より、都市部との交通アクセスがよいという、立地条件から、消費者に訪れてもらうことで、旬の一番おいしいの新鮮な農産物を味わえる観光農業を目指してきた。</p> <p>○農園を訪れる子供達を喜ばせたくて飼い始めたロバのふん処理のための堆肥づくりが環境保全型農業を始めるきっかけとなった。</p> <p>○農園内で排出される家畜糞や料理・加工時の食物残さ、もみ殻、米ぬかなどを使った、自家製の堆肥やボカシ肥料をつくり、栽培に利用している。さらに養分バランスを考えた施肥管理や天敵の活用など、病虫害の発生しにくい環境作りに取り組み、また、果樹では羊ややぎ、水稲では米ぬかを利用した雑草管理を進め、農薬の使用量を減らしている。</p> <p>○一昨年前から、地元農業者と「枚方食農の会」を結成し、体験農園に取り組んでいる。環境保全型農業に関心のある都市住民が参加しており、ボカシ肥料や堆肥づくりを含め、氏自身と同じ環境保全型の農法での栽培体験ができると好評である。</p>
<p>株式会社 ささ営農 (兵庫県 たつの市)</p>	<p>水稲、バジル</p>	<p>11ha (81戸)</p>	<p>○株式会社ささ営農は平成14年4月1日に営農組合を設立し、平成18年7月7日に法人組織となった。現在、組合員82名で、経営面積43.5haを有し、水稲+小麦+大豆の2年3作体系を主体に、バジル等の野菜や加工にも取り組み、計画的に牛糞や豚糞堆肥の散布による土づくりも行っている。</p> <p>○水稲では平成18年から減農薬減化学肥料栽培を試作し、平成19年から環境創造型農業推進事業や全国農業システム化研究会実証調査で本格的に取り組んでいる。(現在、約10ha)</p> <p>○バジルは食品会社との契約栽培で、平成16年から無農薬減化学肥料栽培で取り組んでいる(現在、約1.1ha)。</p> <p>○平成19年から畜産農家と連携して、堆肥散布事業に取り組む、地元醤油会社の醤油粕を用いた牛糞堆肥を市内の営農組合に、現在、約25ha散布している。更に、近隣集落の農地の遊休化を防ぐため、平成18年から利用権設定で、地域の担い手として農地の維持管理を行い、現在、約10haを管理している。</p>

			<p>○平成15～16年度のほ場整備前に、「ささ水辺の生きものを守る会」を結成し、地域のNPO法人「ピアしんぐう」と共に、毎年、田んぼの学校やビオトープ等で、生き物調査や都市との交流、世代間交流を行い、環境保全型農業への取り組みに対して理解を深めている。</p>
<p>奈良県エコファーマー 連絡会(奈良県)</p>	<p>茶・野菜・水稲等</p>	<p>253. 7ha (212戸)</p>	<p>○平成19年10月より、エコファーマー間および関係機関との連携により環境保全型農業技術の向上を図るとともに、エコファーマーの取り組みについて消費者・流通関係者に対して積極的にPRを行い、環境と調和のとれた農業を推進するエコファーマーを会員とした任意団体である。平成21年10月末現在、会員数は212名。</p> <p>○全会員の共通課題として、土づくりと施肥設計を取り上げ、環境保全型農業推進研修会を奈良県と共催している。</p> <p>○環境保全型農業による農産物の高付加価値化を目指して、イベント等で農産物の直売やPRパネルの展示、パンフレットの配布等を行い、消費者・流通業者に対してエコファーマー制度の周知・取り組みのPRを積極的に行っている。</p> <p>○消費者を会員の農園に招待し、環境保全型農業技術を農園で紹介、収穫体験や調理体験を行う消費者交流会「エコファーマー体験ツアー」を開催している。</p>
<p>JA兵庫六甲 三田合鴨 稲作会 兵庫県 (兵庫県 三田市)</p>	<p>水稲、合鴨</p>	<p>8. 6ha (11戸)</p>	<p>○水稲合鴨同時作(合鴨を利用した水稲の有機栽培と合鴨の肥育)を、平成9年からJA A、普及センターの呼びかけにより10aのから試作を開始した。</p> <p>○平成10年 「農林水産省有機農産物表示ガイドライン」に沿った栽培に向けて「JA兵庫六甲三田合鴨稲作会」を4戸(66. 5a)で結成し、ガイドライン表示をして米を販売を開始した。</p> <p>○平成13年 JAS法改正に伴ってJAS認定を取得し、平成18年には、兵庫県認証食品認定を受けた。</p> <p>○合鴨は、10aあたり20羽前後放鳥し、出穂前に引き上げ雛は共同導入、引き上げ後は共同肥育をしている。肥料は、たい肥油かす、米ぬかを使用している。農薬は、不使用であり、種子も共同温湯消毒、育苗培土も化学資材を使用していない物を特別注文している。</p> <p>○合鴨米として販売し、合鴨肉とともに「パスカルさんだ」で販売している。</p>

			<p>○放鳥会や農業まつりでの合鴨レースや串焼き実演販売といったPR活動を行い、消費者に対する安全と安心、信頼の証としての有機JASの認定への積極的取組みを行っている。</p>
<p>北庄中央棚田天然米生産組合 (岡山県 久米南町)</p>	<p>水稻</p>	<p>1ha (19戸)</p>	<p>○北庄地区は、すり鉢状の急傾斜の底から、わずか2a程度の小さな水田が段々と積み重ねられた棚田で構成され、日本棚田百選(岡山県下 4地区)にも認定されている。</p> <p>○棚田の維持と地域の活性化を進めるため、平成6年5月に生産組合設立し、特別栽培による棚田天然米の生産による環境保全型農業の実践と都市住民や地元小学校等との交流を通じた普及・啓発活動を実践している。</p> <p>○組合員1戸あたり3a以上の圃場で、昔ながらの種子消毒(塩水選・温湯)・有機肥料栽培・天日架干し、農薬の使用回数は除草剤1回だけに止めた、環境に優しい農業を実践している。</p> <p>○都市住民との農作業体験等の交流会、田んぼの学校開講(地元小学生を対象に、田植え(5月)と稲刈り(9月)の農作業体験学習を実施)している。最近では、田んぼの学校として水利調査や昔の農作業体験、三世代交流等を実施し、食と農の大切さや地域文化伝承も併せて実施している。</p> <p>○耕作放棄地の再生活動(棚田支援隊)を平成19年8月より活動を開始し、棚田ファンクラブを母体とする棚田支援隊や隣接地域住民の応援を頂き、草刈や景観形成作物(彼岸花・そば・レンゲ等)の植栽を実施している。</p>
<p>境地区協議会 (岡山県 美咲町)</p>	<p>水稻、そば</p>	<p>22.6ha (32戸)</p>	<p>○境地区は、美咲町の中南部に位置する山間農業地域で、農業用ため池と天水に頼る棚田地帯である。農業者の高齢化・担い手不足が進む中、遊休農地と農村景観の保全管理のため、そばの作付けによる美しい村づくり活動を地域ぐるみで実践している。</p> <p>○組合がそばの作業受託に取り組み、稲の作付けができない遊休化しつつある農地でのそばや景観形成作物の菜種の栽培を支援し、地域内での荒廃地防止に貢献している。また、地域住民の協力で地域全体を猪防護のための電柵で囲い、草刈りなどの管理を行っている。</p> <p>○平成19年度から農地・水・環境保全向上対策事業への取り組みを始め、水稻・そばによる環境保全型農業を実践している。水稻・そばの生産農家は、地元酪農家による堆</p>

			<p>肥など有機質肥料の利用や温湯種子消毒等による化学肥料・化学合成農薬の低減に取り組み、エコファーマーを取得している32名が水稻(13ha)とそば(9ha)の栽培を行っている。</p> <p>○棚田を訪れる観光客に美しい景観を楽しんでもらおうと、赤い花の咲く紅そば(高嶺ルービー)を作付けたところ、多くの観光客が訪れた。これを機に、昔からこの地域で栽培されていたそばや、地区内で育てた野菜などを活用した、こだわりのそば屋「紅そば亭」の営業をスタートさせた。</p>
<p>よしむら農園 代表 吉村 一成 (香川県 丸亀市)</p>	<p>こまつな等 60品目</p>	<p>1. 35ha</p>	<p>○農業開始当初から化学肥料、化学合成農薬を使用しない有機農業に取り組み、現在では、ビニールハウス18a、露地117aに、こまつな、みずな、ちんげんさい等約60品目で、延べ2.42haの作付けをしている。</p> <p>○有機農業の技術では、近隣畜産農家の堆肥・ぼかし肥料・貝化石等を土壌診断(pH、EC)に基づいた施用、黄色蛍光灯・防虫ネット被覆による害虫対策、食酢による病害対策、分解性マルチや自走式草刈機による雑草対策を実施している。</p> <p>○新規参入者として農業経営基盤がない状態から有機農業に取り組むとともに、有機農業への就農希望者等に対し、適確なアドバイスができる指導者として、県内有機農業の振興に尽力している。</p> <p>○県内に点在している有機農業者との積極的な交流を重ね、平成21年1月には、有機農業者を販売面から支援する「さぬき有機の里推進会」を設立し、有機農業者の交流の輪を広げている。</p> <p>○農園で生産された有機野菜を直接食べられる農家レストラン「よしむらカフェ」を運営し、有機農業・有機農産物の理解促進に努めている。</p>
<p>和田丸有機グループ (愛媛県東温市)</p>	<p>野菜</p>	<p>6. 1ha (7戸)</p>	<p>○昭和52年より、設立当初より女性が中心で、中山間地域の小さな圃場や傾斜地の効率の悪い条件で栽培をしている。旬の野菜を箱に詰めた「野菜セット」が中心で、野菜は、86品目と多種多様である。</p> <p>○すべて有機JAS認証を取得し、適地適作を心がけ、夏場の害虫発生が多い時を避け、時期を少しずらしながら栽培している。</p> <p>○中山間の農地は土地が狭くほ場が離れているため、農薬の飛散が少ない、多品目の</p>

			<p>作物が作りやすいなど、悪条件を逆に利用して有機栽培を確立し、これにより、耕作放棄地の発生を抑制している。また、地区の行事に集荷場を開放し、地域とのつながりを大切にしている。</p> <p>○有機農業を理解してもらうため、年2回、消費者を招いて春のタケノコ掘りと秋に収穫感謝祭を実施している。また、水田を提供し、田植から稲刈りまで農業体験を実施している。更に、地元農家に圃場に来てもらい、生産の手伝いをしてもらうことで、一層の理解と信頼関係を築いている。</p>
--	--	--	---

<p>岳特別栽培組合 (佐賀県 有田町)</p>	<p>水稲</p>	<p>5. 7ha (8戸)</p>	<p>○水稲については、標高が高い場所で栽培しており、夏場の気温が平坦地に比べて低く、過剰な生育が抑えられることで、紋枯病などの発生が少なく、本田での薬剤防除を抑えた栽培に取り組んでいる(平成14年度開始)。</p> <p>○水稲の土づくりとして、冬季に赤クローバーを播種し、水稲移植前に緑肥としてすき込んでおり、すき込んだ後に発生する有機酸の効果により雑草の発生を抑制している。赤クローバーを栽培しない圃場では、町内のブロイラー農家から供給される発酵鶏糞による堆肥を利用し、化学肥料の削減を行っている。農薬についても、カメムシ対策として籾酢を散布するなど、天然資材を活用して化学合成農薬の削減を行っている。</p> <p>○農業・農村への理解の促進のため、幼稚園生や小学生を対象とした農業体験、福岡市や佐世保市などの都市住民を対象とした体験交流などの取り組みを実施している。</p>
<p>雲仙市にこまる生産組合 (長崎県 雲仙市)</p>	<p>水稲</p>	<p>113. 3ha (188戸)</p>	<p>○平成17年より、水稲における化学肥料・農薬の大幅低減への取り組みを試験的に取り組み、平成19年度に全組合員が、エコファーマー認定及び長崎県特別栽培農産物認証を取得し、農地・水・環境保全向上対策(共同活動・営農活動)に取り組んでいる。</p> <p>○当生産組合員を中心に地域全体で水田での浅水代かき、有機質資材の利用などの環境負荷低減に資する取り組みを行う一方、組合員は水稲の種子消毒は生物農薬を利用したり、発生予察情報を利用した適期防除による化学農薬の低減や有機質肥料を利用した化学肥料低減を実現している。</p> <p>○組合の栽培の中心となる吾妻・愛野地域は諫早湾干拓調整池に隣接した地域であり、その水質保全対策が強く求められている中、当生産組合が中心となり、水田の浅水代かきによる濁水管理や減化学肥料による環境負荷低減対策を強く意識した活動を展開し、環境保全型農業の取り組みを強くアピールしている</p>
<p>宜野座村エコ野菜研究会 (沖縄県・宜野座村)</p>	<p>葉野菜等</p>	<p>0. 4ha (5戸)</p>	<p>○花卉類の生産には品質安定のため農薬が欠かせない。そのため、農薬による健康被害が懸念された。そこで、安心安全な農作物を栽培し、村全体に低農薬・低化学肥料栽培の必要性を訴えたいと、平成18年11月に3人の花卉農家が、宜野座村エコ野菜研究会を設立し、花卉栽培を行いつつ葉野菜の高設ベンチ栽培に取り組み始めた。</p>

			<p>○現在の当研究会の会員数は5名、栽培品目はベビーリーフ、ミズナ、ベガナ、カラシナ、テゴロナである。平成18年度からは、安全・安心な農産物生産と環境保全型農業への取組みの一環としてエコファーマーの認定に取り組んでおり、これまでに4戸の農家がエコファーマーに認定された。さらに、平成20年度までに4戸の農家が5品目で沖縄県特別栽培農産物の認証を取得した。</p> <p>○高設ベンチ栽培に取り組んでおり、年に8作葉野菜を栽培している。高設ベンチ内の用土は海砂を主体とし、肥料は自家製のボカシ肥料を用いて有機質肥料主体の施肥設計により、化学合成由来の窒素成分の9割減に取り組んでいる。病虫害対策としては、防虫ネットを使用し、害虫の侵入を防いでいる。また、収穫後には栽培床を水で満たし、殺虫に取り組んでいる。現在、化学肥料や化学合成農薬をほとんど使用せず、葉野菜を栽培している。</p> <p>○当研究会の取組を契機とし、宜野座村が「有機の里宜野座村推進協議会」を立ち上げ、基本構想・基本計画を策定した。村独自で取り組む「宜野座村エコ農産物ロゴマーク」の使用認証も受けている。</p>
--	--	--	---

特別賞(全国環境保全型農業推進会議会長賞)

名称 (所在地)	対象作物	実施面積	取り組み概要
生活協同組合連合会 東海コープ事業連合 (本部 愛知県 名古屋市)	—	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>○東海コープ事業連合と4会員生協(コープぎふ、みかわ市民生協、名古屋勤労市民生協:めいきん生協、コープみえ)と連携して2000年度に農産物自主認証制度を設置、同年8月より認証を開始した。</li> <li>○東海コープ事業連合が策定する農産物栽培自主基準と「栽培自慢表示基準に合致した生産物に対して、取引先・生産者団体が「栽培自慢」認証要綱に基づき、自主申請する。申請を受付した案件について、事務局(農産商品部・品質保証部)で事前に申請書類等の内容を点検した上で会員生協と東海コープ事業連合で構成する「栽培自慢」認証委員会(毎月開催)に提案し、審査、認証を受ける。</li> <li>○「栽培自慢」自主認証制度は、農薬の使用回数削減を指標として産地生産者団体を評価し、商品本体や共同購入注文書、店舗商品案内等に「栽培自慢マーク」を表記して、利用普及を推進する事業のしくみである。</li> <li>○H20年度取扱実績は、認証品目291品目、28道県+中国1(広東バナナ)取扱事業高29.2億円、対象分野の事業高構成比は38%である。</li> <li>○「栽培自慢」認証制度では、自治体や農業団体、NPO法人で認証している特別栽培農産物や環境に配慮した農産物等について、認証のしくみや内容を確認した上で「栽培自慢」認証品として受入れている。(愛知:いきいき愛知、岐阜:ぎふクリーン農業、みえ:安心食材、北海道:イエスクリーン、鹿児島:かごしまエコ農産物 など)</li> <li>○店舗で発生する鮮魚加工残さ等を回収し、取引先の肥料工場でぼかし肥料の原料にした上で野菜生産に活用する取り組み事例がある。</li> </ul>
生活協同組合パルシステム神奈川ゆめコープ (神奈川県・横浜市)	—	—	<ul style="list-style-type: none"> <li>○パルシステム連合会に所属する神奈川県の生協である。2000年4月1日に前身生協である2生協(けんぼく生協・生協ゆい)が合併して設立され、現在、神奈川県内におよそ23万3千名の組合員が所属している。</li> <li>○提携をしている3産地と年間で交流を行い、環境保全型農業に取り組み生産者を支</li> </ul>

			<p>援し、また、その地域の生産者にも交流事業の規模を拡大することで、環境保全型農業に取り組みを広めている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○産地の環境保全型農業の実践している圃場での農作業体験を中心に、参加者と生産者による合同での生きもの観察会の実施や交流に参加している組合員の協力を得て、参加後の広報で交流内容を機関紙やホームページなどで発信して、取り組みの意義を広めている。また産地にも組合員が頻繁に訪れ、それらの取り組みを行うことで地域生産者へも感心が波及している。</li> <li>○環境保全型圃場の生産物、(例:環境保全型の田んぼの玄米)の消費を組合員が積極的に行うよう、交流に参加者した組合員と一緒に販売促進を行い環境保全型農業の有用性を生産者、消費者の双方が意識できるように取り組んでいる</li> <li>○環境保全型農業に携わる生産者を増やし、支持し購入する組合員を増やし、農村と都市の共生による活力ある地域を生み出す、というこれまでの取り組みをさらにすすめる為に、交流を行っている産地と、それぞれに産地協議会を設立している。</li> </ul>
--	--	--	---